

えんぼとたんぼの始発駅 里山ビオトープ二俣瀬	会 報 第 179 号	2016年6月23日 里山ビオトープ二俣瀬をつくる会 編集責任者：原谷 一誠
---------------------------	--------------------	--

1. 活動報告（事務局 記）

- 5月28日（土）臨時に維持活動を行いました。作業実施前に水車の修復について協議しました。原田事務局より水車の大きさを一回り小さくすれば、50万円程度で修復が可能とのことです。ただし、既存水車の撤去費用は含まれません。
水路の溝上げ（ビトープ下流の水田に水を引き入れるため）、田圃周辺の草刈り、ため池の除草、草原水路内の除草作業を実施しました。
参加者は原田会長、田村副会長と会員で10名でした。

- 6月3日（金）二俣瀬小学校1年生～4年生18名が藤井・笠井先生に引率で学習に来られました。つくる会より原谷・前田・原田マでビオトープ創設の経緯や外来種と在来種の動植物についての説明と現物をお教えしました。
又17時から田植え準備（駐車場の草刈り・田植え綱張り・苗のJA厚東から受け取り・テント張り・机やイスの運搬）を実施しました。原田会長・吉富・渡辺・原田マ各会員でした。

- 6月4日（土）稲作体験の田植えを行いました。途中で少し雨も降りましたが、無事終わることが出来ました。最初に原田会長による神事、田植えのやり方の説明があり、終了後に膝癒しとして、お結びと豚汁が提供され、原田事務局の音頭で田植え歌を歌いました。参加者は、親子自然観察隊22名（親11名、子11名）、二俣瀬子ども会29名（親16名、子13名）、山大学生5名、二俣瀬小学校校長、大学生1名、会員21名の総勢79名でした。秋の稲刈りが楽しみです。

- 6月11日（土）福川こどもクラブのこども探検隊の皆様がビオトープへ遊びに来られました。子ども29名とスタッフ20名が10時から15時までビオトープの生き物をつかまえようと元気に走り回り、いろんな生き物を探して捕まえていました。お昼には草餅を搗いて、きな粉餅にして食べました。捕まえた生き物は確認して元の場所に逃がしました。つくる会は講師7名と見学2名の9名が参加しました。

- 6月12・15日（日・水） 昭如山遊ロード二俣瀬の草刈り整備。17日二俣瀬小学校3・4年生野外研修の予定で事前調査と草刈り。二俣瀬会員1名・2名にて実施。
野外研修は雨のため中止となり、23日に変更予定。

- 6月19日（日）13名の会員が参加し、維持活動をしました。
作業内容は、①草原および遊歩道周囲の除草、②椎茸原木の設置、
③湿地帯周辺水路の修復、④ため池および蓮田の除草
作業前に、以下の事項について協議しました。①水車（水車見積りを市役所に提出）、
②中電ボランティア、③竹チップー搬入、④地球温暖化ネットワーク総会
作業後に一時間ほど、関根事務局長ほか会員4名にて、竹林の間引きを行いました。

2. 今後の予定（事務局 記）

◎来訪者

—7月6日（水）中国電力(株)による里山ビオトープ清掃作業

◎行 事

—7月3日（日）エコアップ（ため池イグサ・湿地帯スゲ間引き）

—7月16日（土）沢登り・水棲動物観察事前調査と維持管理（エコアップと残務草刈り）

3. 来訪者の声

今月はありません。

2. 会員の声-「つばめ再来-2」（原田満洲夫 記）

先月巣作りを始めたツバメ夫婦、待ちわびし雛の誕生と老夫婦がいかに怖がらないように気を使っているかお知らせします。

勝手口は常に開けっ放し、家を空ける際、途中で気が付き戸締りをしていないことを再確認し、座敷に上がる古い建具の引き戸を**ド忘れし**”ガラッ”と開けツバメをびっくりさす事再々。勝手口からの出入りを極力避け、大回りして玄関を利用する毎日である。これだけ気を使った出入りをしたことが、**過ってあったらどうか？ 自分の家だ!つばめども**

ところが産卵も済みツバメ夫婦が交代でづくねて（温めて）いて、この2～3日で雛が孵化しようかと、いう時期6月19日朝2時半、老夫婦の愛犬「ハル」が突然けたたましく啼き続き、続いてツバメ夫婦が異常な鳴き声、老夫婦は急ぎで確認この時ばかりは、”ガラッ”と引き戸を引き開け、驚いたことに頭上のツバメの巣に1.5mもあろうか青大将がぶらさがり、一羽を頭から啜え（くわえ）さらに次の卵を狙っていた。

寝ぼけ眼も吹っ飛んだ老夫婦は長いもの、竹か木でもと、慌てて探しだし、それを振り回し何とか青大将からツバメを助けた。更に青大将との格闘に愛犬ハルも加わりかわいそうだが処分し、夜が明けるのを待った。

夜が明けても当分ツバメは帰ってこず、何ととっても老夫婦はおぞましいものを見たことと、行った行為がツバメを助け青大将を処分した気持ちを、落ち着かすまで時間がかかった。

朝6時半再びツバメが様子を伺いに帰って来たので、すべて落ち着きと静けさを取り戻したのである。近々雛がかえれば賑わしさが、うれしさとやかましさを呼び込んでくるだろう。



6月22日 雛の誕生確認すそれも2羽。まだまだピーピーは言わないが何とか難関を突破して我が家で初めての雛が、元気に生育する事を望むのみである。

“勝手口 ツバメとられ 腰屈め”（腰を曲げて背をひくくすること）

5. 親子自然観察隊（田植え）（中本 亜矢子 記）

総勢約80名による田植え体験が行われました。当日、山口県は梅雨入りしましたが、午前中は小雨がぱらつく程度で済んで、なんとか無事に作業を終えることが出来ました。

かつて、田植えは実際の農作業であると同時に、豊作を祈る田の神の祭りという大切な神事でもあったそうです。里山ビオトープ二俣瀬では、伝統的な田植えの行事を少しでも次世代を担う子どもたちに伝えるため、地元の会員が工夫を凝らした稲作体験を準備しています。

まず最初に、原田会長の説明を受け、田植えに携わる全員で田に祈りを捧げました。それから、田植えのやりかたの説明がありました。田植え用の小さな苗は、3本を、根元を持って田にそっと植えること。泥が深いので、深く植えずぎると苗が埋まってしまいます。田んぼの端と端にロープが渡されるので、そのロープに沿って一列に並び、掛け声とともにロープに沿って苗を植えます。みなが植え終わったらロープが後ろに動きますので、また掛け声とともにロープに沿って稲を植える。怪我のないように気を付けて、みんなで楽しく田植えをしましょう！云々というようにお話だったと記憶しています。

大人たちに促され、裸足になった子どもたちは、おっかなびっくり田んぼの中へ…。代掻きされた田んぼは泥がふかふかしていて、ふくらはぎの真ん中くらいまで泥に埋まって、動きにくそう。「わぁ〜」とか「きゃあ〜」とか言いながら、よろよろしている子どもたちを、あいだに入った大人たちが励まして、何とか田植えをすすめていました。中腰での長時間の作業はけっこう辛いので、「もう半分まで植えたよ〜」「あと少しですよ〜」などと励ましながら行いました。疲れてきたところを見計らうようにして、原田さんが田植え歌を歌いながら田植え指導をされていました。辛い作業をリズムよく、楽しくすすめるための「田植え歌」、かつての農村の田植えの様子が目に浮かぶようでした。

ロープ係の吉富さんは、ロープを動かしながら「哇」も造っておられました。「哇」とは、田の水を漏らさないようにする堤防のようなものですが、短い時間も無駄にしない動きに感心させられました。約1時間半かけて田植えが済むと、「膝癒し」として、つくる会会員による手作りの豚汁、お結びがふるまわれ、みな笑顔でいただきました。田植えをやり切ったあとのご飯のなんとおいしいこと！



田植え



終わって皆でバンザイ

親子自然観察隊の感想

★川口颯太

手も足も泥で汚れたけど、楽しかったです。田んぼにタガメがいたと思ったけど、タイコウチだと教えてもらいました。いねがりっぱにそだつといいな。

★磯部陽向（母）

当日は雨が心配でしたが、丁度よい天気は何よりでした。水を張った田んぼの中へ入るのは、息子だけでなく私自身も初めての経験でした。中腰の体勢で少しずつしか進めず、「そろそろ飽きてくるかなあ…嫌がり出すかなあ…」と思いながら作業を進めましたが、最後まで諦

めず楽しんで田植えをしてくれました。田んぼの中にいる生き物を見つけては、隣にいた子供会のお兄ちゃんに優しく教えてもらって、今回も楽しい一日になったようです。その日の夜に、私は肩や腰・膝の裏が激しく筋肉痛になり、機械もなく手作業で田植えをしていた時代があったんだと思うと、農業に携わる方々の苦労を体験することも出来ました。作業後に頂いた豚汁はとても美味しかったです！当日は天気が心配された為、食事だけでなく雨避けのテントの準備までしていただき、本当にありがとうございました。

★月本直秀

田植えは、2回目だったので、苗を3本ずつとって植えるのが上手に出来ました。去年よりたくさん植えて、疲れたので途中で交代しました。楽しかったです。稲刈りも楽しみです。

★仲嶋（母）

こんばんは。先日の田植え、実は私が一番楽しみにしていました。初めての体験、とても貴重な体験となりました。そして、温かい豚汁。とても美味しかったです。ありがとうございました。

★金子実侑

一番楽しみにしていた田植えなので、とっても楽しかったです。稲刈りも楽しみにしています。たくさん収穫できるといいです。

★国平清咲

田植えで、初めてドロドロの田んぼに入って、はじめは気持ち悪くなって思ったけど、だんだん楽しくなりました。おたまじゃくしや、ヤゴなどの生き物も発見しました。これから苗がどんな風に育つか楽しみです。

★国平（母）

私も初めての体験でしたが、苗を3本にわけるところ、田んぼの中を歩くことも難しく子供と一緒にとてもいい体験ができました。途中、幼稚園の子供が飽きてしまい、私は一緒に田植えをやめてしまいましたが、最後まで頑張って植えた子供たちには関心しました。収穫までのお世話も楽しみながら子供たちと体験できたらなと思います。

★下川航平

苗を植えるとき、4つの印の所に植えました。3つの束にして上手に植えられました。終わってからの豚汁おいしかったです。

★下川（母）

田植えの歌の、米は宝だ宝の草を植えりゃこがねの花が咲く というのが印象的でした。

山口大学学生の感想

★藤本

私は初めて田植えというものに参加してこうやってお米は作られるんだと自分でやってみて初めて実感しました。田植えをする前はやり方もわからず、一列になって植えるので1人が遅れると全体が遅れるため上手くできるか不安でした。最初は泥に足を取られこけそうになったりうまく土に刺さらず植えなおしたりしてしまったものの教えてもらった通りに足跡を消すために手で土をならしたり根元を持って植えたりしているうちにだんだんとコツをつかみ、楽しくやることができました。しかし腰を曲げてずっと植えるのはとても辛く、大学生ならまだしも高齢者の方は大変だろうなと思いました。普段体験することのない体験をさせて頂き、さらに何気なく食べているお米を作ることの大変さを身をもって体験することができた貴重な時間だったと思います。また収穫の時期にも体験する機会があると聞いたのでぜひその時も参加したいなと思いました。

★松尾

子供と触れ合うことができ、楽しかったです。また子供と触れ合う機会があったら参加したいです。

★竹内

今回初めて田植えを行った。手で植える難しさと食べ物の大切さを確認できた。

★江口

ビオトープでの、2回目の田植えだった。前回は、途中で休憩したり集中力が続かず、最初から最後まで植えることができなかったが、今年は楽しく最後まで植えることができた。収穫も楽しみだが、それまでの維持活動も積極的に参加したい。

6. ビオトープ関連：「山口県の昆虫たち」 (管哲郎 記)

(6) ウラナミアカシジミ *Japonica saepastriata*

鱗翅目 シジミチョウ科

ブナ科のクヌギ、ウバメガシ、コナラなどに産卵し発生します。山口県には平地よりも山地に多くみられますが、6月上旬より7月下旬にかけて宇部市、山陽小野田市でも見られます。全国的には九州以外の本州、四国、北海道に生息しているようですが、宅地化が進み雑木林の管理放棄などによる環境悪化などで、近年急速に個体数が減少しています。翅の表は全体に橙色をしています。裏は橙色の地色に黒色の三角径、四角径の模様が縦横に直線的に並んで入っており、大変美しいシジミチョウです。特定の生息地の場所は発表できませんが、クヌギ林やナラ林では意外と見つけれられるかもしれません。

生態として日中は枝や葉に止まりあまり動きませんが、夕方から日没頃に活発に動き回ります。“アカシジミ”と同じ性質のようですが、日中では栗の花によく飛来し吸蜜しますのでナラやクヌギの木の近くにあるクリの木の花を注意してみてください、見つかる可能性は多いと思われます。



栗の花を吸蜜



クヌギの葉に止まる

7. 会よりの連絡事項

1. 新入会員

学生会員として山口大学工学部の江口靖尚さんが入会されました。

住所：755-0037

宇部市西梶返1丁目8-28 メゾン船ヶ崎103

2. 水車の修復見積は3案にて終わり、まとめた計画書と合わせ宇部市環境政策課の方に提出しご相談をいたしております。結果についてはもう少しお待ちください

8. 編集後記

19日の作業中に、ウシガエルの卵が見つかりました。ビオトープで最も厄介な生き物で、大きくなったオタマジャクシや成体は、ビオトープ中の生き物を食い尽くします。特定外来種でもあり、当然ながら直ちに処分しました。

ウシガエルについては、一昨年から本格的に卵の除去を始め、一昨年は16箇所、昨年は大幅に減り7箇所の卵を除去しました。除去数の減少を個体の減少と考え喜んでいたのですが、勘違いだったようです。今年は、現時点で12箇所を除去しています。さらにウシガエルらしきオタマジャクシの集団も見ました。このままだと、今年は一昨年の除去箇所数を超えそうです。10年以上と言われるウシガエルの寿命を考えると、卵除去の効果が表れるのには、数年かかりそうです。

ウシガエルに限らず、ビオトープの外来種はしぶといです。冬に除去したはずの、ため池のオオカナダモは、睡蓮の下で花を咲かせています。ウチワゼニクサ（タテバチドメクサ）は、除去を始めて5年以上になりますが、いまだ蔓延っています。エコアップを始めたばかりのころは、これらの撲滅を目指していましたが、今では不可能ではないかと感じています。

ビオトープでは、生き物の持ち込みは禁止されています。意図的に持ち込むことは論外ですが、植物の種子などを無意識のうちに持ち込むことがあります。これは防ぐことが非常に困難です。自然に入り込むもの（ウシガエルやオオカナダモ）もあります。今は何とか、これらを目立たないようにしています。しかし数年後には、外来種が蔓延っても、それを容認しなければならぬ事態が生じるかもしれません。

（ 前田 歳朗 記 ）